

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
I. 理念に基づく運営	11
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	4271102297
法人名	有限会社 スローライフ・プランニング
事業所名	グループホーム ぎんなん
訪問調査日	平成 20 年 2 月 25 日
評価確定日	平成 20 年 4 月 22 日
評価機関名	社会福祉法人 長崎県社会福祉協議会

○項目番号について

外部評価は30項目です。
 「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。
 「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。
 番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

[取り組みの事実]
 ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

[取り組みを期待したい項目]
 確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

[取り組みを期待したい内容]
 「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。
 家族 = 家族に限定しています。
 運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。
 職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。
 チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	4271102297
法人名	有限会社 スローライフ・プランニング
事業所名	グループホームぎんなん
所在地 (電話番号)	長崎県西海市西彼町下岳郷733番地1 (電話) 0959-27-1919

評価機関名	社会福祉法人 長崎県社会福祉協議会		
所在地	長崎県長崎市茂里町3番24号		
訪問調査日	平成20年2月25日	評価確定日	平成20年4月22日

【情報提供票より】(平成20年 1月 1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 16 年 5 月 1 日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	17 人	常勤 12 人, 非常勤 5 人, 常勤換算	7.5 人

(2) 建物概要

建物形態	併設 単独	新築 / 改築
建物構造	木造平屋 造り	1 階建ての 1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	28,000 円	その他の経費(月額)	光熱費等 14,800円
敷 金	有(円)	(無)	
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円)	有りの場合 償却の有無	有 / 無
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 約840 円 (1月 25,000円)		

(4) 利用者の概要(平成 年 月 現在)

利用者人数	17 名	男性 10 名	女性 7 名
要介護1	4 名	要介護2	4 名
要介護3	4 名	要介護4	4 名
要介護5	1 名	要支援2	名
年齢	平均 83.4 歳	最低 67 歳	最高 94 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	大石共立病院
---------	--------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

雑木林を切り開いた広大な敷地に平屋2棟が建っている。玄関を入ると雛壇、梅や菜の花が生けられ季節感があふれている。また、広いバラ園や畑もあり、閑静な佇まいである。地域の拠点となることを意識して、自然環境を活用したネイチャースクールを開催しているほか、「どんぐり銀行」というユニークな緑化運動を通じて、地域住民、特に子どもがホームを訪れ利用者とふれあうことで、利用者が子どもを見守るというような光景を管理者は思い描いている。ホームは延命の場ではなく利用者の尊厳ある生活をサポートする場であり、「共に生き切る」という考えのもと、職員は常に研修等でスキルアップを図り、地域生活を支援するケアを実践している。利用者は、運営者の弾くウクレレに合わせて合唱したり、俳句を作ったり、縫い物、料理などを職員が利用者から教わりながら一緒に行う等、穏やかにお互い信頼し合い暮らしているホームである。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	改善課題として理念等の掲示などが挙げられており、理念を玄関付近に掲示し、情報提供票等は壁に掲示せずファイルに綴じて玄関に置いている。また、安全面に配慮し洗剤等の保管場所の目かくし、台所の整理整頓にも常に気をつけるなど、改善に取り組んでいる。職員は評価の意義をしっかりと受け止め、全員で課題を検討し、納得して改善に取り組んでいる。
①	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	自己評価については、職員のスキルアップの手段として、全職員がそれぞれに取り組み、ミーティング等を通して意義を再確認しながら協議を重ね、ホーム全体の自己評価としてまとめている。また、自己評価をもとに、いかに利用者に寄り添う時間を少しでも多く作るかという課題に一生懸命取り組む姿勢が見受けられる。
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	運営推進会議は、平成19年1月の開催以降、利用者の看取り等様々な理由で開催できていない。会議では、認知症の理解や地域との関わりについての説明や意見交換を行っている。メンバーは市担当課長、地域住民、民生委員、家族の代表等で構成されている。管理者は運営推進会議を定期的に開催する意向を持っているので、今後の取り組み、会議の活用について期待したい。
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	家族のホーム訪問の際に、利用者本人の様子等を報告するとともに、意見や苦情、不安等を聞き出すよう声かけを行い、把握するように努めている。また、家族会を開催しており、その際にホーム運営も含めて家族の要望等を出してもらっている。家族からの意見等はどんな小さなことでも真剣に受け止め、十分検討してなるべく早く対応して、運営に反映させるように心がけている。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	ホームを住民が集う拠点として、ネイチャースクールや「どんぐり銀行」という緑化活動の事務局を担っており、地域住民に立ち寄ってもらえるよう努力している。また、ホームのバザーに近くの商店から寿司やおでんの提供があり、益金の一部を共同募金に寄付したり、地域のバザーや行事にも参加したりと交流を図っている。時々近所の人から野菜や花などの差し入れがあったり、利用者が一人で外出していると住民から連絡があったりして、地域との協力関係も築いている。

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	人権尊重とノーマライゼーションの理念に基づき、「敬意、傾聴、寛容、受容、愛情」の精神を持って支援することを基本理念とし、さらには、各ユニットごとにもそれぞれ「笑顔でおとしよりとふれあう」「整理整頓自分らしい部屋づくり」という目標を掲げている。	○	誰にでもわかりやすい理念を検討されるということなので、地域密着型の考え方を取り入れた理念を作り上げることを期待したい。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	管理者と職員は月2回のカンファレンスや月1回のミーティングを通して確認しあいながら、利用者とともに生きることを心がけてケアの実践に取り組んでいる。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域のバザーに参加したり、ホームでのバザーでは近所の商店からすしやおでんを提供してもらい、その益金の一部を共同募金に寄付したり、認知症勉強会を行ったりしている。また、近所の住民から野菜などの差し入れがあったり、利用者の外出に気づかないときは近所からホームへの連絡があるなど地域の見守りが自然にできている関係が築かれている。実習やボランティアも積極的に受け入れている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	管理者と職員は、各自のスキルアップの手段として全員自己評価を行い、それを基にホームとしての自己評価を作り上げている。また、いままでの評価結果に対して、理念を額に入れて掲示したり、洗剤の保管場所の工夫をするなど、納得したうえで改善すべきところは積極的に改善に取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議の規則はあるが、運営推進会議は平成19年1月7日に認知症の理解と地域との関わりや防火について話し合ったが、それ以降、利用者の死亡等々都合が悪い時が多く、実施されていない。その間家族会は6月に一度開催。メンバーは行政、住民(郵便局長)、民生委員、家族等で構成されている。	○	今後は定期的に運営推進会議を開いていろいろな意見や苦情、要望等を聞くことで運営に反映することはもちろんのこと、地域にもっと根付くように理解してもらおう場として活用されることを期待したい。報告等ばかりでなく、時には勉強会の場とか会議の内容に変化を持たせてもいいのではないだろうか。

長崎県 グループホームぎんなん

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市担当者との連携はとれており、特に利用者の中に生活保護受給者がいるため、その金銭管理や地域福祉権利擁護事業の活用等について相談したり、DVDによるホームの様子や行事等を行政、社協に伝えている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	ホームでの利用者の暮らしぶりや健康状態等については、電話や家族の訪問時に報告している。また、毎月の請求、金銭管理等の報告をするときにも手紙を添えている。また、特に遠方の家族にはDVDで利用者の様子を知らせている。	○	さまざまな方法で家族への伝達をされているが、ホーム便り等の作成も検討できればより効果的ではないだろうか。
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の訪問時に意見、不満、苦情等を出しやすいように声をかけたり、家族会を通じて意見をもらうようにしており、運営に反映できるように真摯に受け止めている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	利用者が安心して落ち着いて過ごすことができるように、職員はあいさつや声かけを毎日心がけている。また、月に1～2回以上は催し事をしてスタッフ全員の顔が利用者にはわかるように配慮したり、退職者が出た場合は2～3日前に告知するようにしている。また、朝から昼食が済む人手がいる時間帯のみ、地域の元気な高齢者(女性)2人に多少の謝礼で介助業務に協力してもらっている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新任職員は各種マニュアルを使って、管理者等が講師となってホーム内研修を実施したり、スキルアップのために自己負担で研修を受けたりしている。中堅クラスは一人年3回程度、ホームで必要と判断した外部研修(県介護福祉士会や医療系研修が多い)を受講させている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	2ヶ月に1回、医療系のネットワーク活動に参加する他、地域リハビリ広域支援センター研修会を受けたり、平成20年4月より市の地域密着型サービス事業連絡協議会を立ち上げ、サービスの質を向上させるため、より専門的な視点での研修、情報交換を行う予定である。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	利用をしようとする方には、職員がケアマネジャー同行のもと、ご本人の情報を得るため必ず自宅訪問して面接したり、家族と会ったりして、なじみの関係をつくったうえでサービスを開始している。受け入れの際主治医とも相談している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は、利用者を尊重して共に生きるという考えを念頭に置き、一緒に食事したり、玄関先に近隣住民が提供してくれた菜の花や梅の花を生けたり、昔洋服仕立てを仕事としていた利用者から縫い物を習ったりして寄り添うケアを心がけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人ひとりの思いや悩みをせかせせず、できるだけ受容するようにしており、決して無視やこども扱いもせず、本人の希望に沿うように努力している。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	ケアマネジャーや担当スタッフが窓口となり、利用者がより良く暮らすための意向や希望を聞き、心身の状態等をスタッフ全員で観察し、カンファレンスを開いてアセスメントしている。また、利用者・家族、スタッフの参加の元に、利用者本位の介護計画を検討・作成し、作成した介護計画は、利用者・家族に説明・納得を得て実践している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	定期的カンファレンスを開いてスタッフ全員でモニタリングを行って計画を更新するとともに、状態変化が生じた場合は、緊急に家族や医師の意見も求めて、柔軟に計画の変更を行っている。	○	利用者のケア最優先という方針は当然のことながら、せっかく丁寧に見直しをした結果をモニタリングとして記録に残していないことは残念である。書類にきちんとした形で記録しておくことは、ケア実践の更なる向上に効果的ではないだろうか。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	地域にもっと溶け込むため、こどもに集まってもらえるように、ホームのまわりの自然環境を生かしたネイチャースクールを開催することで、利用者との世代間交流を図ったり、どんぐりをホームに持参して100個貯まると苗木をもらえるというユニークな取組をしている。他に通院や墓参り、散髪等々個別ニーズに柔軟に対応している。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者一人ひとりのかかりつけ医がおり、事業所としてもそのかかりつけ医との連携を蜜にしなが積極的に受診の支援を行っている。事業所の協力医療機関と契約して医療連携体制もとっている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	看取りケアの指針を作っており、それに基づいて利用者や家族にトラブルや誤解がないように、まず入居時に説明し、納得してもらったうえで同意書に署名してもらっている。職員はホームは延命の場ではなく、本人が尊厳を持った生活をサポートするための場と認識して共に過ごしている。状態悪化の時にはその都度病院に移す等常に家族と相談しながら対処している。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	特に排泄介助では、おむつ交換時そっとタオルをかけた後、他の利用者に気づかれないようにさりげなく声かけをして排泄を促しているが、時にこども扱いをして誇りを損ねるような対応をする時もある。記録類は利用者の目に触れないように注意している。	○	大小共有スペースのトイレがあるが、仕切りがないのが気がかりである。一緒に用をたすことがないようにソフト面で職員が配慮しているが、できればカーテン等で仕切りがあれば、利用者をもっと安心できるのではないだろうか。
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者一人ひとりの個別の希望等をかなえることはできないが、できるだけ時間的拘束をしないように、それぞれのペースにあわせるように配慮している。夜の入浴希望などにも職員の勤務時間を柔軟に組み替えて対処している。		

長崎県 グループホームぎんなん

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の力を發揮してもらって、毎日のように一緒に食事を作りテーブルを囲んで食事を楽しんでいる。また、旬の食材の「つわ」や「よもぎ」を採って料理をしたり、誕生会や花見に弁当を作って食べたりなど、食べる楽しみを増やすようにしている。崎戸の伊勢海老まつりにも出かけたり、通院の帰りに時折外食をして気分を変えるなど、さまざまな食事の工夫をしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	ほとんど毎日入浴できる。時間帯も職員の勤務時間を工夫して柔軟に対応している。近所や知り合いからもらったレモンやゆず、菖蒲などを使って季節ごとの入浴を楽しんだり、各地の温泉の入浴剤を湯船に入れて、温泉気分を楽しんでもらっている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	利用者一人ひとりの生活歴や能力を活かして、昔洋服仕立てをしていた人が衣類の縫い物を職員に教えたり、俳句を作ったり他の利用者に指導したり、大正琴を弾いたり、他に調理や掃除、園芸等々それぞれに役割を担って、いきいきと暮らしている様子が窺える。昼下がりには運営者が弾くウクレレに合わせて童謡を口ずさんでいた。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	日常の買い物や散歩につきあったり、近所につわ取りと一緒にでかけたりして、見守りの姿勢で外出の支援をしている。また季節ごとに花見や各地のまつり等々にでかけるようにしている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	玄関は日中鍵はかけていない。特にセンサーなどもない。玄関以外に台所の勝手口等2～3ヶ所利用者が自由に出ることができるドアがあるが、職員は気がけて見守ったり、一緒についていく支援をしている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	今年度は防火責任者退職等の理由により、まだ消防訓練がなされていない。近々のうちに地元住民との消防訓練の予定をしている。ホームの半径500m～1km圏内の約20軒の近隣住民に災害時の協力が得られるようにネットワークができていて、その人達の連絡網を作成している。その際、利用者の家族に対して、利用者の個人情報提供の同意や地域住民の個人情報保護の同意を双方覚書として取り交わしている。	○	早急に防火責任者を置き、消防計画を作成して消防署に提出し、今年度中に消防訓練等を実施することが必要。このことは利用者の生命に関わる重要な取り組みであり、何よりも優先されるべき課題であることを認識して実行に移すことを期待したい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランスを考えて事業所の栄養士が毎日の献立を作っており、糖尿病を患っている利用者については医者と相談しながら食事を作っている。水分についても健康状態を勘案しながら摂取させている。週に1回は栄養を考えた上で冷蔵庫の残り物をチェックし、利用者と相談しながらその日利用者が食べたいものを作っている。体重測定も月に1回行っている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関外は何も置いておらず、少々殺風景とも感じられるが、ドアを開けるとバリアフリーのロビーに雛壇を飾り、桃の花と菜の花が生けてあって季節感が溢れている。また片隅にはトロのグッズも置いてあり、メルヘンの世界も醸し出している。共用空間にも目の届く範囲にソファやテーブル等があり、利用者は思い思いに寛いでいる。また壁にはカレンダーや利用者作の俳句に運営者のすばらしい絵画やボランティアの子ども達の絵を額に入れて目の高さに飾ってあり、暖かい日差しが入っている。台所は対面式で共用空間を見渡せる位置で、職員の目も届きやすい。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の入り口には利用者のイメージに合わせた表札が出ている。居室内は入居前の自宅と似せた配慮に心がけ、できるだけ馴染みの家財道具等持ち込んでもらっている。なかには仏壇と遺影を飾り、その前に果物等を供えている利用者がいたり、家族写真を飾ったり、ミッキーマウスを飾ったり、利用者の好みに合わせたレイアウトになっている。		